

国語科教育における地域言語教育(2)

— 方言の役割について —

早野 慎 吾

A Study on the Regional Dialect in Japanese Language Education (2) Dialectal Role and Function

Shingo HAYANO

1. はじめに

文部科学省 (2004) 『中学校学習指導要領解説 国語編』(一部補訂版p.73) では、方言を次のように説明している。

方言は、生まれ育った地域の風土や文化とともに歴史的・社会的な伝統に裏付けられた言語である。その表現の豊かさと魅力は、情報化社会であるがゆえに、一層価値を高くしているとも言える。方言が担っている役割を十分理解させ、方言を尊重する気持ちを持たせるようにしながら、共通語と方言とを場に応じて使い分けられるように指導することが大切である。【傍点は筆者が加えた】

方言が担っている役割や機能とは何か。教科書教材の多くは、くだけた場面で使用され、地域の社会性や文化と深い関わりを持っており、気持ちや感覚を適切に表現できることばと説明している。それらの説明は、伝統方言が盛んに使用されていた時代の説明としてはよいが、現況の説明としては不十分である(早野2007a p.148)。中学校学習指導要領解説の引用部分に「共通語と方言とを場に応じて使い分けられるように」とあるが、このコードスイッチング(code switching)の概念と運用が現代社会においては重要であり、方言という概念もコードスイッチングを前提とした説明が必要である。早野(2007a)では、現在の国語科教育に適した地域言語の分類を行い、方言・共通語・標準語などの基礎的概念について整理した^(注1)。本稿では、さらに、国語科教育で説明すべき方言の役割や機能について分析する。

2. 方言の社会的評価の変遷

方言は現在では尊重されるべきことばとして扱われ、方言の価値観も変化してきているが、迫害され続けた経緯がある。そのため、現在でも方言は悪いことばという認識が社会(特に高年層)には残っている。

方言という名称は、平安時代初期のものだと推定される『東大寺諷誦文稿』に既に用いられて

おり、「辺境のことば」「田舎のことば」という意味で使われている。キリシタン資料として貴重なロドリゲス(1608)『日本大文典』でも方言は卑語に分類され、誤ったことば、悪いことばとして扱われている。江戸時代は、江戸語はややプラス意識で捉えられるようになっていたが、方言そのものは、やはり卑語として扱われていた。

明治時代、標準語の普及が図られた。日本が欧米先進諸国に対抗するために国民を統制する必要があった。軍隊、学校制度、郵便制度、鉄道などが全国統一の制度として導入されたが、国民統制の必須条件として日本語の統一、つまり標準語の普及が必要とされたのである。特に明治30年頃からの標準語教育は方言を明確に「悪」と位置づけ、方言撲滅のための教育が行われた。それまでも、悪として位置づけられてきた方言であるが、撲滅の対象になることはなかった。その方言撲滅運動の中心的役割を果たしたのが国語教育である。都染(1988 p.930)には次の記述がある。

「バカ」とか「ヤツ」など、相手の中傷し、軽蔑するような語が「悪」とされるのと同じように、標準語教育においては、方言も「悪」とされたのである。「メンコイ」であろうと「エゲツナイ」であろうと、それがどういう意味であるかにかかわらず、とにかく方言は「悪いもの」「矯正されるべきもの」であった。

各地の学校で、標準語教育(方言撲滅)のためにあらゆる方法がとられた。東北地方のある学校では、休み時間を利用して、全校児童が「ア・イ・ウ・エ・オ」と「口の体操」(発音矯正の訓練)をしたという。また、沖縄では、明治33年に県立一中生徒自治組織である学友会が、

校内ニテ一切方言ヲ使用セザルコト

という規約を作っている。

沖縄では、標準語教育が盛んになり、明治40年頃からは「方言札」という罰則制度が採用されるようになった。「方言札」とは「よいことば」を身につけさせる手段の一つとして、「よくないことば(方言)」を口にしたこどもに教師から与えられる不名誉な札である。一度「方言札」をつけられたこどもは、誰か方言を口にしたこどもを見つけ出し、そのこどもに「方言札」を渡すまでは、いつまでも不名誉なものを身につけておかねばならない。

(中略)

また、ある地方では、「方言票」というカードを作り、方言を使ったことを注意されるたびにその友人からカードを一枚もらうという方法をとっていた。しかし、これらは根本的な標準語教育ではありえず、かえって児童たちを混乱させることにもなった。

方言とは人間が生まれて最初に獲得する第一言語(L₁)であり、くだけた場面で使用されるカジュアルな言語である。言語生活を送っている話者にカジュアルな言語を教育によって使わないようにすることは不可能である。方言を「悪」として位置づけることは、方言話者に悪いことばを使う文化的に低い人間だと意識させることになる。方言撲滅教育は方言コンプレックスを増大させる最悪の結果を招いた。もっとも、これは研究者側の解釈であり、井上(2007 p.49)では「私の時代の校長先生はいい先生で、方言札を作って、使わせた。そのおかげで私たちはい

いことばを使える。方言以外を使えるようになった」という方言札の使用に感謝する話者の意見が紹介されている。

戦後、文部省は方言を許容する方向へと転換する。文部省(1953 p.15)には標準語教育に関する次の記述がある。

もし標準語教育が突如として強力に行われたらそれは児童にとって一大事である。一々の地方音、一々の俚言や言い方が非難されたり匡正されたりするならば、かれらは、はしの上げ下ろしにとがめられた昔の嫁のように、ただおどおどして沈黙を守るほかはなく、せっかく伸びかけた言語能力は、その成長を止めるか、あるいは衰弱することであろう。言語能力が衰えるばかりでなく、ときに小学教育をきらうとうい結果を招くかもしれない。

方言を使わないようにする方向から、標準語と方言の併用を推進する方向に転換してきたのである。現在の国語科教育では、術語として標準語ではなく共通語を使用して、言語的な価値観は述べずに共通語と方言をともに大切なことばと説明しているが、理論的な不備が多い(早野2007a)。

3. 方言の役割とは

上記のような扱いを受けてきた方言であるが、現在では方言の重要性が認識され、冒頭に引用した中学校学習指導要領解説の記述のように、方言と共通語はどちらも大切なことばとして扱われている。基本的な方針において問題はないが、扱われている内容に不備がある。現行の中学校学習指導要領(p.11)には「共通語と方言の果たす役割などについて理解するとともに、敬語についての理解を深め生活の中で適切に使えるようにすること」と記述されている。既に述べたように、教科書教材の方言解説では、現代の若年層話者(児童生徒)への説明としては適切でない場合もある。また、方言を尊重する気持ちを育てるという配慮からと思われるが、特にマイナス面に関しては地域的に制限されていることだけしか説明されていないことがほとんどである。大切なことばであるからこそ、そのプラス機能とマイナス機能を十分理解させることが必要である。

まず、学校教育では、第一言語(L₁)としての役割とカジュアルスタイルとしての役割を解説し、コードスイッチングの概念を適切に解説する必要がある。そして、次に地域文化としての役割を解説する。さらに現行の指導要領や指導要領解説には記述されていないが、併せてことばの変化について解説すると効果的であろう。言語変化は方言の役割ではないので、本稿では詳しく扱わないが、現在の地域言語は激しく変化してきており、高年層の伝統方言形と児童生徒の新方言形を具体例として使用すれば、言語変化を容易に実感させることができる。

3. 1. 第一言語としての役割

方言は、L₁として自然習得したことばである。生活の中で具体的な場面において習得しているので、概念と言語形式が直接結びついている。その点において第二言語(L₂)として、学習によって習得した標準語や公用語とは違う。そのため、方言は気持ちや感情を表現するのに適したことばと表現されることがある。教科書教材「方言と共通語」(『国語 五下 大地』光村図書2005 p.25)には次の記述がある。

各地方の方言は、その地方に住む人々の生活や、その土地の気候、文化と深いかわりをもち、生活の中で生き生きと使われてきました。例えば、北海道や東北地方では、これらの地方特有のきびしい冷え込みを表すとき、「しばれる」という言葉を使います。この言葉を使いたくなる気持ちや感覚は、「寒い」や「冷たい」では言い表せないと、これらの地方の人々は言います。このように、人々の気持ちや感覚をぴったりと言い表せるのが、方言のいいところです。

この記述は、L₁としての方言の特質を解説している。ただし、「サムイ」や「ツメタイ」をL₁として習得した話者にとっては、「サムイ」や「ツメタイ」が気持ちや感情を表現するのに適しているのであり、決して地域差をもつ言語要素が感情表現に適しているのではない。まず、方言が持つL₁としての特質を児童生徒に理解させる必要がある。

3. 2. カジュアルスタイルとしての役割

次にカジュアルスタイルとしての特質を理解させる必要がある。方言(カジュアルスタイル)と標準語(フォーマルスタイル)の区別がある場合、方言は精神的距離の近さ(親密さ)につながり、標準語は精神的距離の遠さ(疎遠さ)につながる。方言の持つこの特質は使われる場面によってプラス機能にもマイナス機能にもなる。親しみを表現すべき相手にはプラス機能として働き、親しみを表現すべきでない相手にはマイナス機能となる。方言はカジュアルスタイルであり、親しい者同士が使用するスタイルということを理解させる必要がある。

聞き手は、話し手の使用する言語的特徴から、話し手の性格や知性に関する評価を行っている。早野(1992 p.14)では次のように記述した。

例えばしっかりした表現をすれば、その人物はしっかりした人格と評価される。甘ったれた表現をすれば、甘ったれた人物として評価される。男性的な表現をすれば男性的に、女性的な表現をすれば女性的に評価される。小学生が敬語を用いてしっかりした表現をすると、何か奇妙に感じることもある。小学生は社会的、人格的に未熟な段階にあるため、それに合った未熟な言語表現をすることが期待されている。その期待に反した言語表現がなされたために奇妙に感じるのである。人は言語表現において人格的な面も評価されている。

話者が社会性を持った人格として評価されるためには、場面にあったスピーチスタイルの使い分けが必要になる。場面に不適切なスピーチスタイルを用いると、人格的にマイナス評価を受けたり、聞き手に不愉快な思いをさせたりすることがある。現代社会では、目上の話者や親しくない話者には基本的にフォーマルスタイルが期待されており、その期待に反したスタイルを用いた場合、円滑なコミュニケーションが成立しないことがある。フォーマルスタイルは、現代社会における円滑なコミュニケーションのために必要不可欠なのである。コードスイッチングの重要性を説く必要性はここにある。多くの教科書教材は共通語の必要性として他地域話者とのコミュニケーションで誤解を招くという理由を用いているが、それは限られた状況であり、そのためにフォーマルスタイルが必要であると説明しても説得力はない(注2)。

3. 3. 地域文化としての役割

教科書教材「方言と共通語」(『国語 五下 大地』光村図書2005 p.25)には「各地方の方言は、その地方に住む人々の生活や、その土地の気候、文化と深いかかわりをもち、生活の中で生き生きと使われてきました。」のように文化や伝統性が解説されている。ただし、一般論を論じても児童生徒には理解しづらいと思われるので、各地域で実際に使われている方言形を用いて、さらに、伝統性を扱うにしても児童生徒が使用している要素と既に使用していない要素とを区別する必要がある。早野(2007a)で論じたが、児童生徒が使用していない方言形を使用すると、方言とは既に使用されなくなったことばであると認識してしまう危険性がある。

また伝統性を強調すると児童生徒が使用している新方言形が説明しづらくなる。近年、宮崎市およびその周辺で念押し表現～コッセン(～だよね)が急速に使用されてきている(早野2007b)。このコッセンは、宮崎伝統方言が基礎となって発生した語形で、学術的な説明は可能であるが、児童生徒に説明することは難しいであろう。また現在、地域言語には東京語の影響を受けてネオ方言形が発生してきている。「もうこのくらいで良いだろう」の「良いだろう」を宮崎県都城市の伝統方言ではヨカガと表現していたが、伝統方言形と関西方言形の混交形ヨカヤロ、東京語形と関西方言形の混交形イヤロなどが優勢になってきている(早野2006)。もちろん、それらの混交形も伝統方言が基礎となっているのであるが、児童生徒に伝統性という観点から説明するのは困難である。

児童生徒たちが使用している方言と、既に児童生徒が使用していない方言では、その役割が異なる。自らが使用している方言はL₁としての機能を持ち、話者のアイデンティティ(identity)と大きく結びついている(早野2006)。そのため、その扱い方によっては児童生徒の人格形成に大きな影響を与える可能性がある(Cummins1984)。

既に失われつつある方言および失われてしまった方言は伝統文化としての役割を持つ。L₁としての身近さや感情表現として適しているということはないが、その地域のことばの歴史として、大きな価値をもっている。梶村・村上他(2006)では伝統琉球方言継承の教育活動が報告されている。これは伝統文化継承のための教育活動であり、L₁としての方言教育とは違った意義がある。

4. 方言イメージ

言語は単にコミュニケーションの手段として意味内容を伝達するだけでなく、社会や文化などに関するさまざまなイメージを反映している。方言には文化や地域性などと関連したステレオタイプのイメージが付随しており、「社会心理学的に不平等な格付けを受けている」(井上1989 p.254)。図1はNHK(1997)の結果をもとに作成した方言イメージによる区画である(井上2007)。

方言イメージは、その地域性や県民性に関するイメージの調査結果と完全に一致しているわけではないが、非常によく似ている(井上1989 p217)。言語体系の相違だけでなく地域イメージや県民イメージなどが大きく反映している。

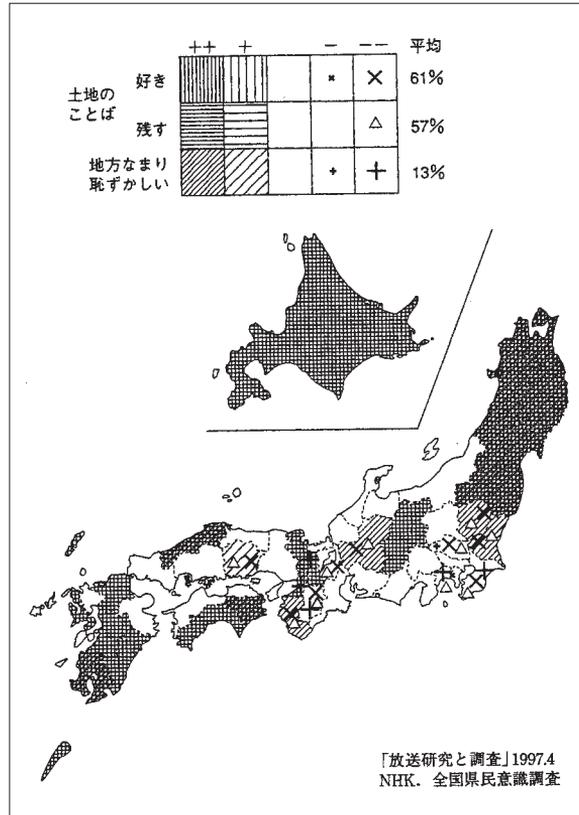


図1 方言イメージの日本地図(井上2007 p.29)

5. 方言話者イメージ

方言イメージと関連して方言話者にもステレオタイプのイメージが付随しており、不適切な評価を受けている。早野(2005)では茨城語話者(茨城語をよく使用する話者)と東京語話者(茨城で東京語をよく使用する話者)のイメージに関する調査結果を報告している。調査対象者は常磐大学在大学生で、18才から22才までの茨城県生え抜き話者である。ここでは調査結果の概略を述べる。

図2は話者特性に関するイメージである。パーソナリティ項目はEysenck(1964)における「外向的・内向的」「情緒安定・情緒不安定」の二つの因子で特徴づけられるものである。茨城語話者には「楽天的」「気まぐれ」「のんき」「活動的」などの外向特性がよくあてはまり、「控えめ」「慎重」「冷静」などの内向特性はほとんどあてはまらない。それとは対照的に東京語話者には「控えめ」「慎重」「冷静」などの内向特性がよくあてはまり、「楽天的」「気まぐれ」「のんき」などの外向特性はほとんどあてはまらない。「積極的」「社交的」という外向特性は、茨城語話者と東京語話者のどちらにもあてはまる。全体的に、茨城語話者は情緒安定・不安定に関わりなく外向特性のすべてがよくあてはまり、東京語話者は内向的で情緒安定の特性がよくあてはまる。

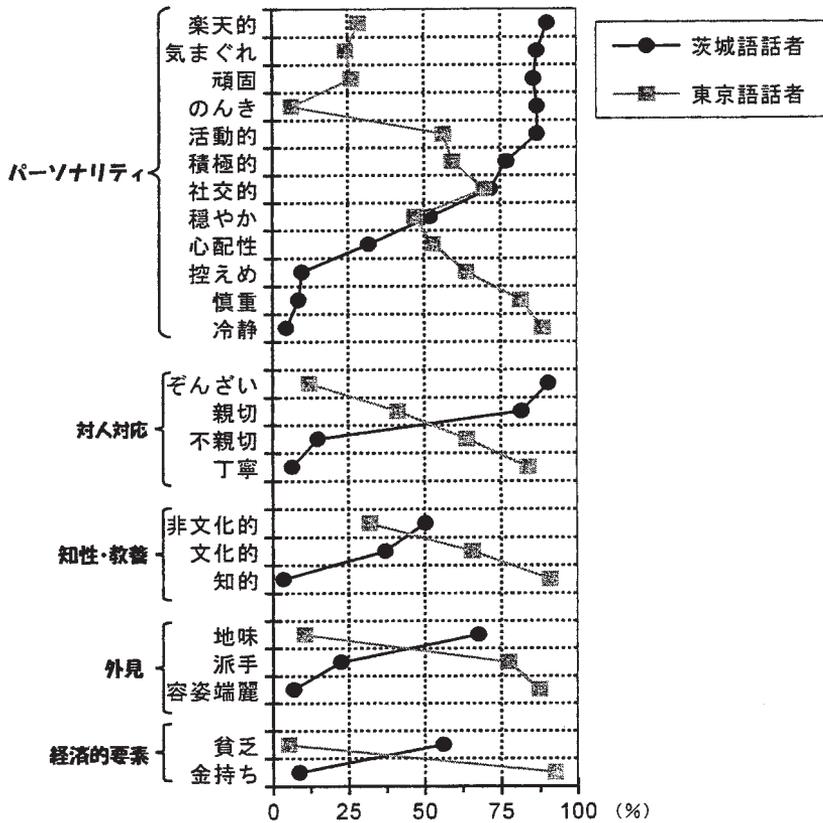


図2 話者イメージ(早野2005 p.90)

対人特性において、茨城語話者には「ぞんざい」「親切」の特性がよくあてはまる。また、東京語話者には「丁寧」の特性がよくあてはまり、「不親切」の特性がややあてはまる。知性・教養特性としては、東京語話者には「知的」がよくあてはまるが、茨城語話者にはほとんどあてはまらない。およそ言語とは関係がないであろう「容姿端麗」という外見特性も話者イメージと結びつく。東京語話者には「容姿端麗」がよくあてはまり、茨城語話者にはほとんどあてはまらない。外見ばかりでなく、経済面においても明確なイメージがある。東京語話者には「金持ち」がよくあてはまるが、茨城語話者にはほとんどあてはまらない。これらのイメージは次の職種イメージと深く結びついている。

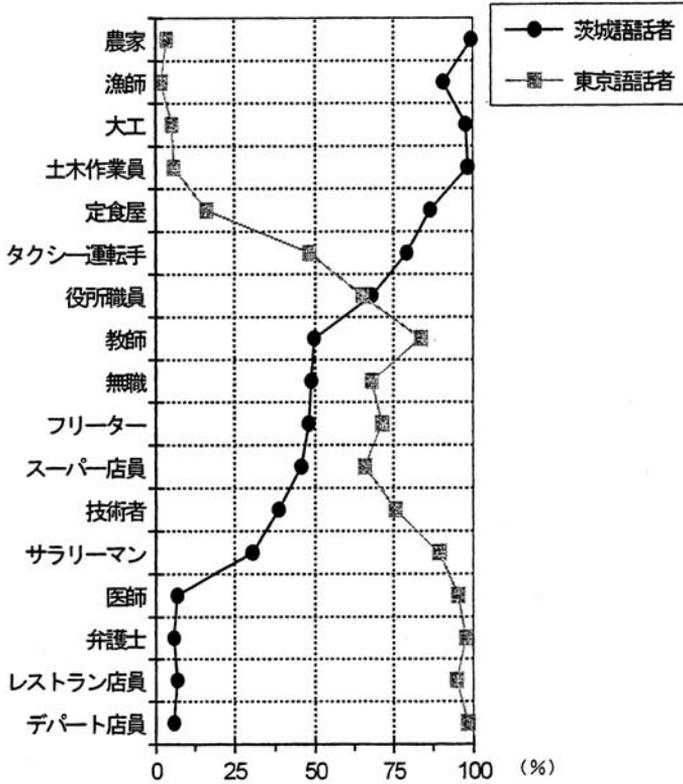


図3 職種イメージ(早野2005 p.90)

図3は茨城話者と東京話者に関する職種イメージである。茨城話者にあてはまるのは「農家」「漁師」「大工」「土木作業員」などのブルーカラーの職種である。ホワイトカラーの職種で、特に知的専門性の強い「医師」「弁護士」やサービス業でもステータスの高い「デパート店員」「レストラン店員」にはほとんどあてはまらない。逆に東京話者にあてはまるのがホワイトカラーの職種であり、特に「医師」「弁護士」「デパート店員」「レストラン店員」などがあてはまる。東京話者にブルーカラーの職種はほとんどあてはまらない。東京話者には非常に高い知性とステータスが付随していることがわかる。茨城話者と東京話者が会話をした場合、ステレオタイプの話者イメージから、既に人間関係に格付けが行われているのである。

方言を使用することによって、話者のパーソナリティや社会的地位まで評価されているのである。ある場面で方言を使用するか標準語を使用するかが社会的評価と関係し、さらには収入にまで絡んできてしまう。井上(2007 p.49)では、方言札の使用に感謝する話者の発言が紹介されていたが、それも標準語が使えるかどうかで社会評価と関係し、さらには金銭と関わってくるためである。教育という現場で、「方言は大切だが、お金を稼げるから標準語も使えるようになれ」とは言えないであろうが、ある場面において方言を使うか標準語を使うかが話者の社会的評価に繋がることは説明しておく必要がある。

6. 方言の新たな価値

方言がどのようなことばとして扱われてきたかは既に述べたが、近年はプラスの価値観が発生してきている。地域の時代を反映して地域性を「売り」にできるようになってきているのである。つまり、その地域性を方言が代表しているのである。店の看板や観光案内に方言形が効果的に使われている例も多い(ロング2006)。

ここでは宮崎方言を使用して地域性を「売り」にしている例をいくつか紹介する。宮崎市で使われている新方言形コッセンであるが、この語形は若年層の女性が主に使用している(男性も使用してきているが)。このコッセンを誌名の由来とする20才以下の女性を対象とした『Cossen』という雑誌(フリーマガジン)も発行されている(図4)。この場合、地域だけでなく世代も関係している。



図4 雑誌『Cossen』

NHK宮崎放送局には「いっチャがワイド」という宮崎の情報番組がある。このイッチャガは、「いいのだ」という意味の宮崎(日向)方言形である。同じく宮崎の情報番組としてはUMKテレビ宮崎の「JAGA²天国」がある。ジャガジャガとは相手に同意するときの宮崎方言形である。これらは宮崎でのローカル放送であり、宮崎県民に宮崎であることをアピールしているものである。

東京の新宿みやざき館KONNEは宮崎の物産を扱っているショッピングセンターであるが、この館の名称KONNE(コンネ)は「来てね」という意味の宮崎方言形である。この場合は、宮崎県外の人に宮崎をアピールしている。その方言を使用している集団に使用される場合は同属意識が強調され、使用していない集団に使用される場合は地域性が強調される。宮崎方言は宮崎の内外で経済的価値をもっているのである。

7. おわりに

方言は、第一言語(L₁)としての機能やカジュアル言語としての機能のように、全国で同じように扱える部分と、方言イメージや方言話者のイメージのように地域的に異なった扱いが必要な部分がある。また、実際に児童生徒が使用しているL₁としての方言と、失われつつある伝統文化としての方言では、その意義が大きく異なっている。そして、方言の価値も時代により変遷してきており、悪いことばとして扱われてきた方言がアクセサリー化したり(小林2004)、経済的な価値をもつようになってきている。現在の実情にあった方言教育が望まれる。

【注】

- 1) 早野(2007a)において、国語科教育に適した方言・共通語・方言・地域語・公用語の定義を行った。本稿では早野(2007a)の定義に従う。詳しくは早野(2007a)を参照されたい。
- 2) 同一地域話者には方言、他地域話者には共通語と設定すると、同郷出身であれば校長先生にも方言を使い、他地域話者ならば同級生であっても共通語を使うという解釈にもつながる。地域性だけでなく、上下関係・親疎関係などの設定が必要とされる。

【参考文献】

- 井上史雄(1989)『言葉づかい新風景(方言・敬語)』秋山書店
- 井上史雄(2007)『変わる方言 動く標準語』ちくま新書
- NHK放送文化研究所(1997)『データブック全国県民意識調査1996』日本放送協会
- 梶村光郎・村上呂里他「地域語伝承に関わる授業の創造 - 「しまくとぅばの日」制定の意義を踏まえて - 」
『国語科教育研究』全国大学国語教育学会111回要旨集
- 小林隆(2004)「アクセサリーとしての現代方言」『社会言語科学』7-1
- ダニエル・ロング(2006)「《わんきゃがやらんば!》観光客の目に付く奄美ことばの言語景観論的試み」
『日本方言研究会第83回研究発表会発表原稿集』
- 都染直也(1988)「方言と共通語の葛藤史」『日本語百科大事典』大修館
- 土井忠夫訳注(1955)『ロドリゲス 日本大文典』三省堂
- 早野慎吾(1992)「方言と地域文化 - 国語としての、また日本語としての方言教育 - 」玉造町教育委員会
- 早野慎吾(1996)『首都圏の言語生態』おうふう
- 早野慎吾(2005)「方言コンプレックスのメカニズム」『Ars Linguistica』12
- 早野慎吾(2006)「宮崎県都城市の言語動態 - 言語形式とアイデンティティ - 」『Ars Linguistica』13
- 早野慎吾(2007a)「国語科教育における地域言語教育(1) - 方言・標準語・共通語 - 」『宮崎大学教育文化学部紀要 教育科学』16
- 早野慎吾(2007b)「宮崎県の言語動態 - 宮崎県南部域を中心として - 」『国文学 - 解釈と鑑賞 - 』2007.7
至文堂
- 宮地裕他編(2005)『国語 五(下)大地』光村図書
- 文部科学省(2004)『中学校学習指導要領解説 国語編』(一部補訂版)東京書籍
- 文部省(1953)『国語シリーズ11 方言と国語教育』文部省
- 文部省(1999)『小学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版
- Cummins, J. 1984. Bilingualism and Special Education: Issues in Assessment and Pedagogy. Multilingual Matters.
- Eysenck, H. J. 1964. Crime and Personality. London. Routledge and Kegan Paul.